

バッハ 300：1723年とその反響

クリストフ・ヴォルフ

当然ながら、記念で祝うとすれば、作曲家の誕生した年か亡くなった年を振り返るのが普通だ。だが我々の視点では、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの生誕 300 周年は 1985 年で数十年も遡る過去のことだし、2000 年の没後 250 周年という記憶も薄れ始めている。そして 2035 年の 350 回目の誕生祝いを打ち出すには、何年も待たなければならない。最近の記憶すべき節目と言え、無伴奏ヴァイオリンのソナタとパルティータ(2020)、ブランデンブルク協奏曲(2021)、平均律クラヴィア曲集(2022)という、ケーテン時代のバッハの 3 つの傑出した器楽作品（いずれも巨匠自身の日付け入り）くらいなのだが、2023 年はバッハの創作・作曲活動の転機となった特別な出来事を思い起こさせる。

1985 年からは、バッハの生涯の 1685 年から 1750 年までが、ぴったり 300 年を隔てて、我々の時代と歩調を合わせて進んできたので、ひとつひとつの作品を通して明らかにされてきたバッハの音楽的成長の詳細を追うには理想的な枠組みとなっている。1723 年春にバッハがライプツィヒのトーマス教会でカントルとして仕事を始めたことから、それを記念する 2023 年は重大な転機となる。彼の創作活動としてそれは 27 年間もの長い期間で、バッハにとって新たなエポックとなっただけでなく、最も生産的な時期の到来でもあった。特に声楽作品、とりわけライプツィヒの初期に多くが書かれたカンタータ・サイクルがそれに当たる。100 年ほど前には、バッハがカントル職に着任したことの重要性は、今日のように入念に評価されることはなかったのだと知っておくべきだろう。というのも、ライプツィヒで作曲された声楽作品の歴史と順序の全貌がようやく解明されたのは、現代の研究者たちの努力があったからなのだ。中でも最も重要なことは、各カンタータがいくつかの年間サイクルのどれに属するか、確定されたことだ。従って、ライプツィヒの最初期 1723-1725 年については、今や本質的に完全な暦を 300 周年記念のために描くことができる。

バッハのトーマス・カントル就任作品は、1723 年 5 月 30 日の三位一体後第 1 主日のためのカンタータ『貧しい者は食べて満たされ』(*Die Elenden sollen essen* BWV 75, Carus 31.075) だ。その 2 日後、彼は正式に任務開始となった。3 ヶ月ほど前の五旬節の日曜日、2 月 7 日には、カントル職への予備オーディションとして、『イエス十二弟子を召寄せ』(*Jesus nahm zu sich die Zwölfe* BWV 22, Carus 31.022) と『汝、真の神にしてダヴィデの子』(*Du wahrer Gott und Davids Sohn* BWV 23, Carus 31.023) のカンタータ 2 作品を演奏し、この有望な候補者は合格となった。前任者のヨハン・クーナウは、カントルを 21 年間務め（それ以前にもトーマス教会オルガニストを務めていた）1722 年に没したが、バッハはすぐに人気の後継者となった。

バッハによるライプツィヒのカンタータ・サイクルは、学年が始まる三位一体後第1主日に定期的に始まって、三大祝祭日のクリスマス、復活祭、聖霊降臨祭に加えて、聖母マリア、使徒、宗教改革の祝日を記念しながら、毎日曜日に行われるものだった。1720年代の過密なライプツィヒの演奏日程を300年を隔てて眺めてみると、毎週毎週新たな楽譜を作り出していたトマス・カントルの終わることのない勤勉さに驚愕してしまう。それを物語っているのが、初期の教会暦年度の数年間に書かれた作品数だ：39曲（1723年）、56曲（1724年）、40曲（1725年）、44曲（1726-1727年）。

カントルの初年度、バッハは過大な仕事量を軽減するために、ヴァイマールから持ち込んでおいたカンタータに時折依存していたことは注目すべきところだ。例えば、1723年の三位一体後第3主日には、彼は1714年に作曲したカンタータ『私には多くの憂いがあった』（*Ich hatte viel Bekummernis* BWV 21, Carus 31.021）を選んだ。但し、こうした場合でも、ライプツィヒでの演奏環境を反映して、ヴァイマールのカンタータを編曲あるいは手直しする必要があった。さらに古い作品を再利用するために、ケーテン時代に書かれた世俗カンタータを、新しい歌詞を導入して教会用の神聖なパロディにした。そうした例は、1724年の復活祭と聖霊降臨祭の第2日、3日の小祝日のためのカンタータ BWV 66 (Carus 31.066), 134 (Carus 31.134), 173 (Carus 31.173) and 184 (Carus 31.184)がある。

1725年中頃以降の生産性の明確な退潮は - 計画通りだったことは明らかなのだが - データがはっきりと示している。バッハは、1回だけ聞かれて終わる短命なカンタータを書くという慣習を捨てて、その代わり確固としたレパートリーの構築を比較的早くから決めていたようだ。その目標のために、彼はトマス・カントルの初期には作品群の構造を作り、そこから何度も引用するようにした。このカンタータのレパートリーという考え方は、クリストフ・グラウプナーやゲオルク・フィリップ・テレマンがそれぞれ1400曲、1750曲以上という膨大なカンタータを残したことや、ゴットフリート・ハインリヒ・シュトルツェルがカンタータの年間サイクルを少なくとも12年分書いたような、同時代の作曲家のアプローチからの明らかな決別となっている。バッハはこのまだ若いジャンルをまさに先駆的な彼の努力で創り上げ、我々が今日も大切にしている単独分野としての芸術作品に発展させた。この点で、彼が創作したカンタータ作品群は、あらゆる類似の作品群を凌ぐものと考えて不思議はない。

ライプツィヒ・カンタータは、どれも一様に高水準の作品だ。さらに、『主よ、裁かないでください』（*Herr, gehe nicht ins Gericht mit deinem Knecht* BWV 105, Carus 31.105）、『目を凝らしそして見よ、かつてこれほどの痛みが』（*Schauet doch und sehet, ob irgendein Schmerz sei*, Carus BWV 46, 31.046）、『わが身体健やかならず』（*Es ist nichts Gesundes an meinem Leibe*, Carus BWV 25, 31.025）、そして『何故に悲しむのか、わが心よ』（*Warum betrübst du dich, mein Herz* BWV 138, Carus 31.138）と、1723-1724年の第1期サイクルからの4例だけを取り出しても、バッハの声楽作品の音楽形式の多様性と表現力の深さが分かる。

このことは、すべて新曲で構成された第2期サイクルではさらに顕著で、1724/25 学年はバッハの生涯で最も多作な年となった。カントルは、『おお永遠、御身、雷の言葉』(O *Ewigkeit, du Donnerwort*, Carus BWV 20, 31.020) を手始めに、コラールの旋律とテキストだけに基づくコラール・カンタータ 44 作品を途切れることなく作曲した。1725 年 3 月 25 日の受胎告知の祝日のために書かれた『暁の星のいと麗しきかな』(*Wie schon leuchtet der Morgenstern* BWV 1, Carus 31.001) でこの周到に構成されたサイクルは突然終焉となったが、理由は不明だ。

1725 年の復活祭の後、バッハは聖書のテキストやコラールの歌詞、その他の詩的要素を基にした標準的な混合形式のカンタータに戻った。それは彼が教会務めの後期に維持した形式だ。だがここでも、作品の冒頭に協奏曲的な長い楽章を導入したり、時には(特に 1726 年以降)オルガンのオブリガートで華を添えたりもしている。1723 年に始めた野心的なカンタータ・プロジェクトは、最終的には 1729 年頃に実態として幕を閉じる。その後、バッハはカンタータの新曲をわずかしか作曲しなかったが、教会での演奏に彼のカンタータ・サイクルを使う時は、その機会に古い作品を手直しして改善を加えた。

1723 年のライプツィヒ着任は、バッハにとってカンタータ作曲に最盛期をもたらしただけでなく、主要な祝日のための作曲にも弾みとなった。ラテン語の 5 声によるマニフィカート BWV 243 (Carus 31.243) は、彼の最初の大規模な声楽作品で、1723 年のクリスマスの晩祷礼拝を想定したものだ。それに続き、1724 年の聖金曜日晩祷のために『ヨハネ受難曲』BWV 245 (Carus 31.245) が作曲され、翌年も再演されたが、大規模な改訂版で、冒頭合唱の“*Herr, unser Herrscher*”は“*O Mensch beweine deine Sünde groß*”に差し替えられた。これら声楽作品の 300 周年はもうそこまで迫っているが、『マタイ受難曲』BWV 244 (Carus 31.244) の誕生祝いはまだ数年待たねばならない。1727 年に書かれたこの作品の初稿は断片しか残されておらず、「偉大な受難曲」(バッハ家ではそう呼ばれていた)が今日我々が知っている最終的な形になったのは、実は 1736 年のことだ。クリスマス、復活祭、昇天祭の素晴らしいオラトリオ三部作も、書かれたのは 1730 年代になってからだ。

1723 年以降の数年間に作曲された声楽曲が数多あるとしても、トーマス・カントルが昔ながらの習慣を守り続けたことは忘れるべきではない。教会の任務と並行して、彼はオルガンやピアノの新曲、さらには室内楽や管弦楽曲も書き続けた。残念ながら、これらの器楽曲は、声楽曲が教会暦と明らかに結びつけられているのとは違って、その作曲時期を正確に特定できない。だがこのことは、記念日がヨハン・セバスティアン・バッハの全作品の様々な側面に光を当ててくれる貢献はあるにしても、彼の音楽の生命力と衝撃はそうした一過性のどんな祝典とも全く無関係であることを、我々に分かりやすく思い起こさせてくれるのではないだろうか。